

当報告の内容は、報告者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」（2016年度第1回（通算第4回）研究会）

Title: Typological Study on “Altaic-type” Languages (The 4th meeting)

日時：2016年7月3日(日)

Date/Time: 3rd Jul. 2016

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

Venue: Room 304 (Multimedia Conference Room), ILCAA

Language: Japanese

1. 蔡熙鏡（AA 研共同研究員，東京外国語大学大学院）

「ニヴフ語の名詞＋名詞複合体と動詞＋動詞複合体について」

（要旨）ニヴフ語では、二つ以上の語幹が一つのアクセント・休止の単位を形成することがあり、その際には後続する語幹の頭子音が規則的に交替する現象がみられる。従来の研究において、この単位の形態・統語的な解釈については様々な見解が出されている。大まかに言えば、この単位を一語とみるか否かで意見が分かれているとみることができる。本発表では、この問題に関する主要な先行研究を概観し、特に複合語との関連で、アクセントパターンの問題を提起した。

2. 松本亮（AA 研共同研究員，京都外国語大学）

「語の合成方法の種類～エヴェンキ語とネネツ語の対照」

（要旨）複合あるいは複合語について、ツングース諸語のエヴェンキ語と、サモエード諸語のネネツ語の状況について報告した。他のアルタイ諸語と比べるとともに生産的手段として複合は持たないものの、“複合語”と呼ばれるような語形成が観察される。しかし、形態的な複合と見なせない形成では複合語とは呼べず、翻訳借用や名詞による名詞修飾として処理すべきである。また、複合動詞についても、限られた動詞が補助動詞として使われる場合を生産的な複合と呼ぶには十分ではないと考えられる。

3. 風間伸次郎（AA 研共同研究員，東京外国語大学）

「アルタイ型言語における主要部内在型関係節について」

（要旨）本報告では、アルタイ諸言語において主要部内在型関係節がどのようなケース

で用いられるかを検証した。主要部内在型関係節構文（以下「内在節」と呼ぶ）とは、次のような文である。

(1) a. 太郎がりんごが皿の上にあったのを食べた。

b. 警官が泥棒がコンビニから逃げ出してきたのを逮捕した。

クロフト (Croft 2001. *Radical Constructional Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.) は内在節を補文節と関係節の中間的な構文として位置づけている。

類型論的に見て、SOV語順およびいわゆる *pro-drop* の特徴と、主要部内在型関係節の存在との間に関係があるということが黒田 (黒田成幸. 1999. 「文法理論と哲学的自然主義」 ノーム・チョムスキー, 黒田成幸『言語と思考』93-134. 松柏社.) によって示唆されている。したがってこれは類型論的観点からみたいわゆるアルタイ型の言語の特徴とみることができる。実際にアルタイ諸言語には、いわゆる形動詞によって形成されるこのような内在節が存在するが、どのような構文が許容されるのか、という点については整理されていない。そこで、本発表ではアルタイ諸言語における内在節のタイプを検証した。その手順は以下のとおりである。まず日本語（および古文）の内在節についてその特徴を整理した。続いてアルタイ諸言語のうちツングース諸語のエウエン語の内在節に関する記述を見た後、例文調査票をもとにした4言語（トルコ語、モンゴル語、ナーナイ語、朝鮮語）の聞き取り調査の結果を示した。結論として、アルタイ諸言語のなかでも内在節の許容度には差が大きく、とくにトルコ語は（日本語含む）他の4言語に比べ許容度が低いことを明らかにした。また、参加者からの情報として一般にチュルク諸語では内在節が用いられにくい傾向があることも紹介された。

報告者の報告後、今後の日程調整および報告者の依頼をおこなった。次回は10/1 (土) の開催を予定している。

文責：山越康裕